

前 奏

司式 杉山昌樹牧師

開 会 招 詞 詩編24編7-10節

奏楽 森永美保執事

* 賛 美 歌 5 : 1 (ソングシート)

1. めぐみゆたけき主を ほめたたえまつれ、そのみいつくしみは ときわにたえせず。
救われしみたみよ、おごそかにうたえ、「憐れみとまことはかわることなし」と。アーメン

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈 禱 書 2 罪の告白①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって、深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。主イエス・キリストの御名によって。アーメン。(詩編51)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈 禱 書 4

- あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
- あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
- あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
- 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
- あなたの父と母を敬え。
- あなたは殺してはならない。
- あなたは姦淫してはならない。
- あなたは盗んではならない。
- あなたは隣人について偽証してはならない。
- あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。(出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 5 : 2 (ソングシート)

2. なやみせまるときも み名をよばわれれば、主はこたえたまいて、この身をばすくい、いとひろきところに いこわしめたもう。主ともにましませばわれにおそれなし。アーメン

公 同 の 祈 禱 23 救済史祈禱 ④ モーセ契約

主なる神さま、あなたは、闇から光が輝き出るように命じ、海と陸とを分けさせられた、
大いなる神です。万物の主であるあなたは、ただ一人「ある」と言われる方であり、「信じ
る者の神となる」と宣言されたお方です。

あなたは、信仰の父祖たちとの契約を覚えて約束の民を顧み、モーセを用いて彼らをエジ
プトの奴隷状態から救い出し、シナイ山で契約を結び、律法と制度と儀式とを授けられま
した。この贖いと契約が、イエス・キリストによって、わたしたちが罪の奴隷状態から救い
出される出来事として実を結んだことを、心から感謝します アーメン。

(出エジプト3～、ヘブライ3、「聖書」一)

献 金 (黒) 教会活動・(赤) 中会修養会 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

ジュニア礼拝

聖書朗読 イザヤ27章2-6節(旧約聖書1100頁)

テサロニケの信徒への手紙I2章9-12節(新約聖書375頁)

説教・祈禱 「木を植える人」杉山昌樹牧師

* 賛美歌 48:1-2 (ソングシート)

1. 主よ、おわりまで 仕えまつらん、みそばはなれず おらせたまえ。

世のたたかいは はげしくとも、御旗のもとに おらせたまえ。

2. 主よ、今ここに ちかいを立て、しもべとなりて つかえまつる。

世にあるかぎり このところをつねにかかわらず もたせたまえ。 アーメン

* 主の祈り 祈禱書1

天にまします我らの父よ

願わくは御名をあがめさせたまえ

御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

我らの日用の糧を 今日も与えたまえ

我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ

我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ

国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

* 頌 栄 63

天つちこぞりて かしこみたたえよ、み恵みあふるる 父、み子、み霊を。アーメン

* 祝 禱

後 奏 (黙禱)

報 告 司会門脇献一長老・受付門脇陽子長老(次週:古澤純一・門脇献一長老)

礼拝当番/献金当番) 森川真菜、堀口有希 次週) 番場のぞみ、堀口愛子/八兒慶汰、番場豊麦

本日 受付 1階:藤井牧子(門脇光生)執事 2階:那珂信之執事 / ZOOM ホスト・録音:大日南悠

次週 受付 1階:古澤迪子執事 2階:若月学執事 / ZOOM ホスト・録音:森川莞太

テサロニケ I 2 : 9-12 「木を植える人」

木を植えるイメージ

今日の説教題は「木を植える人」としました。このテサロニケの手紙には、特にそのような言葉はありません。その点では、説教題としてどうだろうか、と思わなくもないのです。それでも、あえてこの題にしたのは、理由がなくもないのです。例えば詩編 80 編でこんな言葉があります。「あなたはブドウの木をエジプトから移し」(80 : 9)。この場合には、旧約聖書の出エジプト記のことがテーマになっています。神様ご自身がブドウの木を移し植える人に譬えられています。神様は私たち人間を良い地に植えて育てて下さる、このようなイメージです。これとよく似た言葉が、コリント書にあります。「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。」(I コリ 3 : 6)。コリント書では、まさにパウロが自分自身を、木を植える人に譬えています。もちろん、これはパウロがコリントで福音を語って、キリストの教会を立ち上げたということです。そこに、協力者アポロもやってきて、せっせと信徒の世話をしてくれた、という事実を、水をやった、とたとえています。しかし、その背後ですべてを支配されているのは、植えられた人たちを成長させるのは、神様ご自身だと言います。このように、神様が、パウロ達の行動を用いて、それを祝福して用いてくださる、植えられた人たちを必ず成長させてくださる、この基本的なありかたは、実は、今日のテサロニケの個所もあてはまるのではないか、このように考えたのです。

父と神の国

今日の所でパウロは自分たち使徒のことを父に譬えています。一つ前では、母に譬えていましたし、その前は幼子でした。自分たち使徒と、テサロニケの教会の人たちとの深い結びつきを、幼子のように、母親のように、父親のように、という色々な仕方で表そうとしているのです。ところで、私たちが信仰の規準としております聖書において、神様は父親のイメージで語られています。これには、とくに現代のフェミニズム的な視点からは、色々な意見があるかもしれませんが、しかし、父親のイメージが世と共に変わったとしても、神様のイメージが父親に譬えられているのは事実です。このところでパウロは、自分たちを、父親に譬えているのですが、おそらくそれは、あることが意識されています。それは、パウロ達がしていることと、父なる神さまのしていることをあえて重ねているのではないか、ということです。パウロ達がテサロニケでイエス様について語っていること、そして、神様が、イエス様を通して語っておられること、この二つは、当然、ばらばらではないのです。むしろ、パウロ達がテサロニケで行っていることは、父なる神さまのされていること、あるいは望んでおられることを、そのまま行っているはずなのです。もう少し言いますと、パウロ達とテサロニケの人たちとの関係は、人間同士の関りとしてだけで成り立っているのではなく、むしろ、パウロ達と、テサロニケの人たちと、父なる神さまとの間の交わりとして成り立っているのです。福音を伝えるものと、聞く者の間に神様との関係が成り立つのです。

呼びかけを聞く

そのような意味で、パウロ自身が神様のお働きの中に生きている、という事実を強調する言葉が10節で語られています。「わたしたちがどれほど敬虔に、正しく、非難されることの無いようにふるまったかは、あなたがたが証し、神も証ししてください」とあります。この場合、敬虔ですとか、正しさ、と言った言葉は、ただ、自分はまじめに生きた、自分は正しいことをしたはずだ、という意味ではありません。むしろ、このところで意識されているのは、旧約聖書で、「全き者であれ」と言われていることがらです。例えば、創世記でアブラハムは神様からこのように呼びかけられています。「わたしは全能の神である。あなたはわたしに従って歩み、全き者となりなさい。」(17:1)。この場合、アブラハムは、正しいものだから、このように声を掛けられたのではありません。そうではなく、むしろ、「私に従って歩み」という言葉で表されている生き方をするように神様との関係に入れられたのです。神様との関係に生きることが、そのまま全き者であることなのです。そこに神様は、アブラハムを招き入れて下さったのでした。それは、うれしい呼びかけです。パウロは、全く同じ意味で、この呼びかけを、テサロニケの人たちにもなした、のです。それは、11節の終わりから、12節の始めの所で、「あなた方に呼びかけて、神の御心に沿って歩むように」とある通りです。神様が、アブラハムを招いたように、パウロはテサロニケの人たちを招いたのです。それは、神様と一緒に歩むためです。しかも、それを、丁寧に、父親が子を呼ぶように一人一人に呼び掛けたのです。

福音として

そして、現代でも教会とはこの神様からの呼びかけを聞くところです。今わたしたちがこうして礼拝している、このところで、この呼びかけを聞く、そのようなところです。そこで私たちは、神様からの呼びかけの声をいますでに聞いているのです。おや、本当だろうか、と思われるでしょうか。しかし、ほかでもありません、このようにして、聖書の言葉が、語られています。このテサロニケの手紙に描かれたパウロの招きの言葉が語られているのです。まさに今、こうして一緒に聖書に聞いている、この事がすでに、神様からの「こっちにこいよ」、「一緒にやろうじゃないか」という呼びかけなのです。そして、このような神様の呼びかけを一言で表している言葉が福音書にあります。それはイエス様が語っている言葉です。「ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。」(マルコ1:14)。時が来ている、と言います。イエス様によってです。どのような時が来たか、それは、神様と一緒に生きられる時が来た、ということです。わたしたちが、自分にできないことを引き受けるのではなく、何かを偽るのでもなく、この私、ほかでもなく、種々問題を抱えている、この私として、しかし、そうであるにもかかわらず、イエス様によって神の国の中で生きられる、だから、そっぽを向いていないで、このいい知らせを信じて、一緒に生きていこう、これが

イエス様の呼びかけです。

パウロの呼びかけ

そして、今日の所で、おそらく一番中心になることも、この福音です。改めて9節を読んでもみます。「兄弟たち、わたしたちの労苦と骨折りを覚えているでしょう。わたしたちは、だれにも負担をかけまいとして、夜も昼も働きながら、神の福音をあなたがたに宣べ伝えたのでした。」。パウロは、言います。「あなたたちテサロニケの人たちは、よく覚えているし、思い出すことができるはずだ、わたしが労苦と骨折りをしたことを」。ではパウロは何について労苦と骨折りをしたのでしょうか。この9節の中間の言葉を抜かすと、こうなります。「わたしたちは、神の福音をあなた方に宣べ伝えた」。間違いなく、これが文書の骨格です。パウロ達が労苦し骨を折ったのは、福音を宣べ伝えることそのものです。イエス様が、宣言し、宣べ伝えた福音、神の国はあなたたちのすぐそばにある、という福音、これを、パウロ達もまた、苦勞して宣べ伝えた、この事をあなた方は覚えている、これこそが、まずこのところで聞くべきメッセージです。記憶に残るのです。それも、具体的な思い出として記憶に残るのです。その場合に、それはとても具体的なイメージとして記憶に残るのです。ふとした時に、思い起こすこととしてパウロ達の働きが記憶に残ったのです。

昼も夜も働く？

では、一体どのようなパウロの生き方が、テサロニケの人たちの中に残ったのでしょうか。この9節で語られているのは、パウロの伝道者としての生き方です。そこで、先ほど「中間の言葉を抜かして」と言いましたところで語れている部分が意味を持ちます。そこはこうなっていました。「私たちは、だれにも負担を掛けまいとして、夜も昼も働きながら、神の福音をあなた方に宣べ伝えたのでした」。パウロ達は自らを使徒と呼んでいます。神様のために働く人たちです。現代の牧師と全く同じではありませんが、それに近い立場です。旧約聖書で言いますと、レビ族に似ています。レビ族は、イスラエルの民がカナン地方定着した時に、神様から割り当ての土地をもらいませんでした。では、どうするのか、と言いますと申命記には、このように書かれています。「レビ人である祭司、レビ族のすべての者には、イスラエル人と同じ嗣業の割り当てがない。彼らは、燃やして主にささげる献げ物を自分の嗣業の分として食べることができる。同胞の中で彼には嗣業の土地がない。主の言われたとおりに、主が彼の嗣業である。」律法で定められた捧げもの、人々からのささげものが彼らの糧になる、そして何よりも、神様ご自身が彼らの割り当てである。レビ人でも、使徒でも、あるいは現代の牧師でも、基本的な考え方はこれに尽きると思います。

背中で語る

しかし、テサロニケの教会は、開拓を始めたばかりでした。実際にどの程度、パウロ達がそこに滞在したのかははっきりとしませんが、おそらく長くて数か月だったと思います。その間、以前一緒に読みました、フィリピの信徒への手紙を読みますと、何度かフィリピ教会からテサロニケ教会に援助があったようですが（フィリピ4:16）、これも十分ではなかった

ようです。そのように開拓を始めて数か月の幼い教会に、原則を当てはめても仕方ありません。そこで、パウロ達は福音を宣べ伝えるために、必要なことをすべてしたのです。教会員に負担を掛けないためには、世の仕事をするのもいとわなかったというのです。しかし、それは明確な目標をもってのことです。それは、福音が伝わって、テサロニケの人たちが、神様の御心に沿って歩むようになるためです。そして、そのようなパウロの姿こそが、ある意味では、父親が、その子供にするように、一人一人に呼び掛ける、無言の言葉だったのではないのでしょうか。だいぶ古いコマーシャルに、「男は黙って」という言葉がありました。実際のところ、ただ黙っているだけでは、お父さんの愛は伝わらなかつたりしますが、けれども、いくら言葉巧みに語っても、生き方でしか示せないこともあります。パウロがテサロニケでしたのは、この背中で語る父の愛を現わしていたのではないのでしょうか。

テサロニケの人たちのように

大変残念ですが、わたしは、未だ、このようにして皆さんに、思い出していただくほどの印象を与えるような時を過ごしていないかもしれません。その点では、赦されるのなら、このようなパウロの姿に倣って、テサロニケの人たちが、パウロやテモテやシルワノの労苦する姿と共に、神様の福音を思い出すような、そのような関係を皆様とともに作っていきたくと願っております。しかし、今ここにおられる方々、昔から教会に集っておられる方でしたら、岩永先生の思い出の中に、熊田先生の思い出の中に、教会において忠実に働かれた姿の中に、同時に神様の呼びかけを、その良い知らせの呼びかけを思い出されるのではないのでしょうか。牧師が教会のために働く、それは口先のことではなく、生き方において、すなわち、福音を生きることによって、励まし、慰め、強く勧めることのはずです。そして、それは、牧師一人で行うのではなく、教会としてそのように一緒になって生きていくなかで明らかになるのです。

木を植える人

いずれにしましても、教会を木に譬えるのであれば、ある時、神様によって、その神様の御心を地になそうとする人によって植えられることで始まります。そして、教会は成長し、大きく増え広がり、さらに次の世代の木を植えていくこととなります。そのような繰り返しの中で、わたしたちは、神様の招きにこたえて、神の国の中に生きていくのです。

祈り

父なる神さま、あなたは、私たちを愛し、多くの期待を込めて、木を植えるように、私たちをあなたの愛する者として、このところに植えてくださいましたから感謝します。私たちは、あなたのみ言葉によって、水を注がれ、育っていくものです。どうぞ、このようなあなたからの恵みを日々受け取り、良き実りをもたらすものとしてください。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。